

Title	親密な人間関係が対人関係観に及ぼす影響
Author(s)	多川, 則子; 吉田, 俊和
Citation	対人社会心理学研究. 2002, 2, p. 65-73
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/5035
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

親密な人間関係が対人関係観に及ぼす影響¹⁾

- 青年期の恋愛関係と友人関係 -

多川 則子(名古屋大学大学院教育発達科学研究科)

吉田 俊和(名古屋大学大学院教育発達科学研究科)

本研究の目的は、恋愛・友人関係の親密化が対人関係観へ及ぼす影響を縦断的な質問紙調査によって検討することであった。対人関係観とは、他者との関わり方について個人が持っている考え方や価値観をさす。関係の親密化は、2人で行う行動や活動の量と相手に対する信頼によってとらえた。3ヶ月の期間を置いて2回の調査を行った。その両方に回答した51名(男性21名、女性30名)が分析の対象となった。その結果、恋愛関係において行動的な親密化が進めば、他者と協調し誠実な態度で接するべきだという考え方や自分の意見をはっきりと主張すべきだという考え方を重視するようになることが分かった。また、このような傾向は交際期間が1年以内の人たちに顕著であった。

キーワード:対人関係の親密化、恋愛関係、友人関係、対人関係観、交際期間

問 題

対人関係の発展理論の1つ、Murstein(1970)のSVR理論では、関係の発展を3段階に分けて説明している。まず、近接性や相手の容貌や振る舞いなどが重要となるS(Stimulus)段階があり、次に、価値観の共有が重要となるV(Value)段階、さらに互いの役割を分担して行動することが重要となるR(Role)段階となる。また、Kerckhoff & Davis(1962)のフィルタリングモデルでは、互いの価値観や欲求が適合しているかどうかの関係の存続には重要であると考えられている。知り合っ間もないころは相手の外見や社会的地位などの情報を基に適合性を判断し、しだいに相手の態度や価値観についてもわかってくるためそれらが類似しているかどうか重要となってくる。このような適合性の判断を時点毎に行い、フィルタリング(ふるい分け)していくというのがこのモデルの考え方である。

これらの発展モデルをみると、関係の進展に伴い、表面的な相互作用からより内面に関わる相互作用へと発展していくことが分かる。関係の初期は外見や近接性などが重要であるが、その後関係が進展するためには態度や価値観の類似性など、個人の内面に関わる要因が重要となってくる。ここで問題にされている態度や価値観の類似性とは、主に個人がすでに持っている価値観を問題にしており、自己開示を通して、互いの価値観を比較すると考えられている。つまり、個人はすでに確立された価値観を持っており、それが2人の間で類似しているかどうか関係の進展を左右するという考え方である。しかし、価値観は必ずしも確立され変化しないものではなく、特に青年期にある人の場合はその形成過程にあり、価値観の変化が生じる可能性もあるのではないだろうか。互いの価値観について話し合うなどの相互作用を繰り返

すことによって、互いに影響を与え合い価値観を変化させていくことも考えられる。加藤(1966)は、人はコミュニケーションの連鎖の中で、他人を自分の中に取り込むことを繰り返しながら自分を変えてゆくと述べている。加藤によれば、コミュニケーションは1人対1人の間を行き交うだけのものではなく、一人ひとりの個人内においてもコミュニケーションは成立していると言う。つまり、相手の言ったことを解釈しそれを自分の中に取り込んだならば、それまでにあった自分とそれとの対話が生じ、それによって新たな自分が形成されていくというのである。常に人は、人とのコミュニケーション、個人内のコミュニケーションを通して新たな自分を形成しているのである。

では、関係の親密化はどのようにとらえることができるだろうか。Berscheid, Snyder, & Omoto(1989)は、関係の親密さを測定するRelationship Closeness Inventory(RCI)を考案している。この尺度は、2人で過ごす時間の長さを測るFrequency(頻度)、2人で行う活動の領域数で測るDiversity(多様性)、日々の行動や意思決定などに影響を与え合う程度を測るStrength(影響力の強さ)の3つからなる。これらを見ると、RCIはいわば行動的な親密さを測定していると考えられる。RCIとは異なるが、関係の親密さを行動的な指標で測定しようとした研究が日本においてもなされている。松井(1990)は、恋愛相手と行ったことのある行動についてたずねた結果、恋愛行動はいくつかの側面に分かれるが、大きく5つの段階を経て、ほぼ1次元的に進行することを見出している。このような恋愛行動の進展の様相は飛田(1991)でも確認されている。また、山中(1994)によると友人関係における行動は4つの内容領域(Companionship, Communication, Consideration, Affection)と4つの親密性レベルが設定できるとしている。

本研究では、これらに従い関係の親密さを行動的な指標でとらえる。

また、Berscheid *et al.* (1989)は、彼らの RCI 尺度と他の親密さ尺度との関連を検討している。その結果、RCI と主観的な親密さ評価(他の関係と比べるとその人との関係はどの程度親密ですか等の質問)は低い相関が見られ、RCI とポジティブな感情の程度とは相関が見られず、RCI の弁別的妥当性が確認されたとしている。したがって、RCI のような行動的な親密さと主観的な親密さは、それぞれが親密な関係の別の側面をとらえていると言えよう。よって、関係の親密さをとらえようとする際にはこの両者の視点からの測定が必要になると考えられる。そこで本研究では、親密さの主観的な側面を評価するものとして「相手に対する信頼」を取り上げる。Rempel, Holmes, & Zanna(1985)は、親密な関係における信頼について検討し、信頼はその関係における経験に基づくくと述べている。二人の間で相互作用が繰り返されると、相手の行動の予測が可能になり、またその行動の原因を相手の意図や動機、傾性に帰属するようになる。つまり、相手は常に自分のことを気遣って行動する、また、自分に対してサポートティブにふるまってくれると感じるようになり、相手に対する信頼へとつながる。このような考えに基づいて、Rempel *et al.* (1985)は、信頼を 3 つの要素 (Predictability, Dependability, Faith) に分類している。Predictability とは相手の行動の予測可能性である。Dependability とは相手の性格や行動傾向を良いものと信じられるかどうかということである。例えば、必要なときに援助してくれる、自分に危害を加えないと信じられるといったことを指す。Faith とは明確な根拠があるわけではないが相手を信じられるという信頼のことである。

本研究では、恋愛・友人関係の親密化を「2 人で行う行動や活動の量」と「相手に対する信頼」によってとらえる。このような関係の親密化が互いの価値観に影響を与えるのかどうかを検討することが本研究の目的である。

ところで、態度や価値観といっても様々な内容のものが考えられるが、ここで取り上げたい価値観は、「他者との関わり方についての自分なりの考え方」である。他者と関わる時、またコミュニケーションを行うときに、どのように行動するかその指針となるようなものである。このような価値観を取り上げる理由は、恋愛関係や友人関係との相互作用を通じて最も影響を受けやすい価値観だと考えたからである。例えば、友人にひどく辛い思いをさせられたとしたら、その人は、自分にひどい思いをさせた友人だけでなく、他の人々に対しても不信を抱くようになることは容易に想像できる。また、誰かと本音でぶつかり本音で話し合うことによって、互いが成長したような経験をしたとしたら、「その人と関わったことが」というよりも

「人と関わることはすばらしいことなのだ」と感じるだろう。このように、ある特定の友人や恋人との関係で経験したことが、その人との関係だけでなく対人関係全般に当てはまるようなものにまで影響を及ぼすことが考えられる。そこで本研究では、この「他者との関わり方についての自分なりの考え方」を「対人関係観」と呼ぶことにする。「対人関係観」は具体的には「人と関わる時はこうすべきだ」「このように接するべきだ」「人と関わることは自分にとって～だ」といった内容をさす。また「対人関係観」は、特定の人との関係にのみ当てはまるものではなく、対人関係全般に適用されるような価値観であると考えられる。

本研究では、青年期に重要と考えられる恋愛関係と友人関係に焦点を当て、関係の親密化が対人関係観に影響を与えるのかどうかについて縦断的に検討することを目的とする。その際、恋愛・友人関係の親密化は「2 人で行う行動や活動の量」と「相手に対する信頼」によってとらえる。

方 法

調査時期

1999 年 6 月下旬から 7 月中旬までの間に実施した(時点 1)。約 3 ヶ月の期間をおいた夏期休業期間終了後、1999 年 9 月初旬から 10 月下旬までの間に 2 回目の調査を実施した(時点 2)。

対象者

調査協力者は、のべ 422 名であった。既婚者と 30 歳以上の人を除外すると(のべ 10 名)、時点 1 では 276 名(男性 117 名、女性 158 名、不明 1 名)、時点 2 では 136 名(男性 50 名、女性 84 名、不明 2 名)となった。回答者のイニシャルと生年月日により時点間の質問紙を照合できたのは 117 名であり、そのうち、どちらの時点においても恋人がいると回答したのは 56 名であった。さらに、想起した恋愛相手や友人のイニシャルが時点間で異なっていた 5 名を除き、残りの 51 名が最終的な分析対象者となった。男性が 21 名、女性が 30 名であり、年齢は 16 歳～26 歳にわたり、平均 19.3 歳であった。大学生が 48 名(94%)、高校生・専門学校生などが 2 名(4%)、不明 1 名(2%)であった。なお、イニシャルの記入箇所には、プライバシーを厳守する旨をあわせて表記した。

調査手続き

時点 1 においては、大学の授業時間に質問紙を実施した。一部の対象者には授業の関係上、各自回答し所定の場所へ提出するよう指示した。また、恋愛経験者を出来る限り多く確保するため、可能な人には恋愛相手にも質問紙を渡すよう依頼した。それについては、郵送で回収した。

時点2においては、試験時に質問紙を配布した。すでに授業が終了している対象者については、所定の場所まで質問紙を取りにくるよう掲示にて通知した。回収方法は、所定の場所へ提出するか、郵送で行った。時点1と同様、可能な人には恋愛相手にも質問紙を渡すよう依頼した。

質問紙

質問紙は、対人関係観の測定、恋愛・友人関係の親密化の測定の2つからなる。その他に、対象者の年齢や学年、恋愛相手および友人の年齢や学年、恋愛相手との交際期間などをたずねた。

(1)対人関係観尺度

長沼・落合(1998)「友達とのつきあい方に関する項目」、落合・佐藤(1996)の「友達とのつきあい方」、山中・石田(1998)の人間観尺度を参考に50項目作成した。予備調査により28項目を選定し本調査の項目として用いた。4件法(そう思わない(1)、少しそう思う(2)、わりとそう思う(3)、非常にそう思う(4))でたずねた。

(2)恋愛・友人関係の親密化を測定する項目

恋愛・友人関係の親密化を「行動の側面」と「相手に対する信頼の側面」からとらえた。

恋愛行動は松井(1990)を基に作成し(25項目)、友人行動は山中(1994)を基に作成した(21項目)。4件法(まったくしない(1)、少しある(2)、わりとある(3)、とても頻繁にある(4))でたずねた。

恋愛信頼はRempel *et al.* (1985)のtrust scaleを邦訳し用いた(26項目)。友人信頼もtrust scaleを邦訳したものをを用いたが、友人関係に不適切だと思われる1項目を除いた(25項目)。4件法(全くそう思わない(1)、少しそう思う(2)、わりとそう思う(3)、非常にそう思う(4))でたずねた。なお、恋愛相手は現在交際の相手を、友人はもっとも親しい友人を想起するよう求めた。

結果

尺度の検討

対人関係観尺度

得られた回答(時点1)に対し、主成分分析(プロマックス回転)を施した結果、固有値の減衰状況と因子の解釈可能性から4因子が妥当であると判断した。因子負荷量が.40以下の項目と2つ以上の因子に負荷の高い項目を除外し、残りの23項目を分析に用いた(Table 1)。なお、時点2の回答に対しても同様の分析を行ったところ、時点1の結果とほぼ同じ結果が得られた。

第1因子は「人に自分のすべてをさらけ出すのは危険だ」「人を信頼しすぎると痛い目をみるに違いない」などの項目からなり、「防衛的な見方」因子と名づけた。9項目からなり、時点1で $\lambda = .76$ 、時点2で $\lambda = .77$ であった。

第2因子は「自分が損をするかもしれないでも人を裏切るべきではない」「他人の問題でも本気で心配するべきだ」などの項目からなり、「協調性・誠実性」因子と名づけた。6項目からなり、時点1で $\lambda = .73$ 、時点2で $\lambda = .66$ であった。第3因子は「人とつきあっていると新しい自分を発見する可能性がある」「人とのつきあいのなかで、自分を見つめなおすことが可能になる」などの項目からなり、「自己成長の契機」因子と名づけた。4項目からなり、時点1で $\lambda = .80$ 、時点2で $\lambda = .76$ であった。第4因子は「人と意見が対立しても自信をもって話し合うべきだ」「自分が正しいと思えば、たとえ人が賛同しなくても自分の意見を主張すべきだ」などの項目からなり、「主張性」因子と名づけた。4項目からなり、時点1で $\lambda = .64$ 、時点2で $\lambda = .63$ であった。

恋愛・友人関係の親密化を測定する項目

(1)行動尺度(恋愛行動・友人行動)

恋愛行動・友人行動 それぞれの回答(時点1)に対し主成分分析を施した。その結果、固有値の減衰状況(恋愛行動 7.77, 2.56, 1.94; 友人行動 6.19, 2.51, 1.82)から、両者ともに1因子が妥当であると判断し、因子負荷量が.40より高い項目を分析の対象とした。なお、時点2の回答に対しても同様の分析を行ったところ、時点1の結果とほぼ同じ結果が得られた。寄与率はそれぞれ31%、29%であった。

恋愛行動は23項目であり、「自分たちの結婚の話をする」「キスしたり、抱き合ったりする」「手を握ったり、腕を組んだりする」などの項目からなる。時点1、2ともに $\lambda = .90$ であった。友人行動は18項目であり、「彼/彼女が問題を解決するのを助ける」「彼/彼女の個人的な用事につきあう」「個人的な悩みをうちあける(うちあけられる)」などの項目からなる。時点1、2ともに $\lambda = .89$ であった。

(2)信頼尺度(恋愛信頼・友人信頼)

恋愛信頼・友人信頼 それぞれの回答(時点1)に対し主成分分析を施した。その結果、固有値の減衰状況(恋愛信頼 6.27, 2.39, 2.04; 友人信頼 7.03, 1.95, 1.65)から、両者ともに1因子が妥当であると判断し、因子負荷量が.40より高い項目を分析の対象とした(Table 2)。なお、時点2の回答に対しても同様の分析を行ったところ、時点1の結果とほぼ同じ結果が得られた。寄与率はそれぞれ24%、28%であった。1因子が妥当であると判断したことは、Rempel *et al.* (1985)に反しているが、3要素間に相互関連があることは想定されており、また実際にRempel *et al.* (1985)でも有意な相関が見られているため、本研究では1因子が妥当であると判断した。

恋愛信頼は17項目であり、「彼/彼女といると、どんなことがあっても安心していられる」「彼/彼女は私の幸せを気づかってくれている」などの項目からなる。時点1で

Table 1 対人関係観(時点 1)の主成分分析結果(プロマックス回転後の因子パターン)

項目内容	1	2	3	4
6.人に自分のすべてをさらけ出すのは危険である	.67	.00	-.08	.06
9.人を信頼しすぎると痛い目をみるに違いない	.66	.02	.00	.01
25.人とのつきあいは難しいものだ	.64	.20	.20	.11
18.人とのつきあいは気を使うものだ	.59	-.13	.28	.00
15.自信を失うくらいなら人と関わらないほうが良い	.58	-.15	.07	.09
21.大きな間違いを犯さないように、よく考えて人づきあいをするべきだ	.55	.27	-.04	-.15
23.人と深く関わる必要はない	.54	-.24	-.05	.12
12.人と本音で語り合うことで傷つきたくない	.53	.13	-.15	-.32
3.人とはその場限りのつきあいで十分である	.47	-.13	.11	.17
22.人と一緒にいるのが好きだ	-.40	.20	.27	-.18
10.本当の姿を見せ合うことで、少くとも傷ついてもかまわない	-.39	.04	.26	.25
26.自分が損をするかもしれない、人を裏切るべきではない	-.04	.72	-.28	.21
1.他人の問題でも本気で心配するべきだ	.04	.69	-.08	.07
20.人づきあいでは、お互いの助け合いが大切だ	.06	.68	.15	-.08
24.自分の意見も人の意見も生かすよう努力するべきだ	.12	.56	.20	.09
8.人とつきあうには相手を信頼することが大切である	-.26	.53	-.01	.11
27.精神的に支えあうような関係が理想である	-.02	.53	.05	.02
19.みんなから好かれるほうが良い	.12	.41	.06	-.40
28.人間関係を良くするも悪くするも自分次第である	-.07	.33	.01	.01
2.人とつきあっていると、新しい自分を発見する可能性がある	.12	-.15	.88	-.07
5.人とのつきあいのなかで、自分を見つめなおすことが可能になる	.11	-.01	.82	.17
11.人とのつきあいのなかで、自分が良い方向に変わる可能性がある	.01	.06	.79	-.07
17.親しい人間関係は自分に多くのものをもたらしてくれる	.02	.28	.53	-.12
14.ありのままの姿を認めあえることは重要である	-.13	.35	.36	.05
4.人と意見が対立しても自信をもって話し合うべきだ	.12	.26	.03	.74
7.自分が正しいと思えば、たとえ人が賛同しなくても自分の意見を主張すべきだ	.04	.22	-.24	.73
13.嫌われることを恐れるべきではない	-.18	-.11	.20	.58
16.どんなに親しい人の意見であっても、影響されることなく決心すべきだ	.28	-.02	.02	.56
累積寄与率(%)	19.5	29.7	37.8	43.7
因子間相関	F1	F2	F3	
	F2	-.20		
	F3	-.31	.43	
	F4	-.12	-.02	.06

注 採用した項目は負荷量をゴシック体で表記した。

=.71、時点2で =.76であった。友人信頼は15項目であり、「彼/彼女はいつも私の力や支えになってくれる」「私自身のどんなことでも彼/彼女に安心して話せる」などの項目からなる。時点1, 2ともに =.86であった。

得点の合成

対人関係観の各因子と、恋愛・友人関係の各指標の平均値をTable 3に示す。恋愛・友人関係の親密化を示す指標として、尺度毎に時点2から時点1の得点を引いた

ものを使用した。それぞれ「恋愛行動の変化」「恋愛信頼の変化」「友人行動の変化」「友人信頼の変化」と呼ぶこととする。

恋愛・友人関係の親密化が対人関係観に及ぼす影響

恋愛・友人関係の親密化が対人関係観に及ぼす影響を検討するために、対人関係観の3因子それぞれに対して重回帰分析(ステップワイズ法)を行った。従属変数はそれぞれ時点2の対人関係観であり、説明変数は時点1

の対人関係観(統制変数として含めた)と恋愛・友人関係の親密化を表す4指標の計5指標であった(Table 4)。統制変数として含めた時点1の対人関係観に加えて、関係の親密化の指標が有意な変数として選択されたならば、関係の親密化も対人関係観に影響することが確認できるであろう。

「協調性・誠実性」と「主張性」に関する分析では、それぞれの時点1の対人関係観以外にも、「恋愛行動の変化」が有意な変数として選択された。その標準偏回帰係数はそれぞれ $=.28 (p < .05)$ 、 $=.31 (p < .01)$ であった。よって、恋愛行動が親密になるほど、一般に人と関わる時は協調的で誠実な態度をとるべきだ、また、自分の意見を主張すべきだと考えるようになることが分かった。

恋愛関係の親密化が対人関係観に及ぼす影響(交

際期間別による検討)

本人にとってこれまででない新奇な体験をすることが、劇的な価値観の変容につながると考えられる。恋愛関係には他の関係にはない独特の行動様式があり、また独特の感情体験をする事も知られており(Davis, 1985)、それらが新奇なものとして体験されるのは、特に関係の初期であると考えられる。したがって、対人関係観に対する影響も交際期間によって異なる可能性があるため、恋愛の交際期間別に相関分析を行った。時点1において、各群に含まれる人数がほぼ等しくなるように、短期群(12ヶ月以内)と長期群(13ヶ月以上)に分けて分析を行った(Table 5)。なお、時点1における交際期間は1ヶ月から4年3ヶ月にわたり、平均1年2ヶ月($SD=13.86$)であった。

Table 2 信頼尺度(時点1)の主成分分析結果

項目内容	恋愛	友人
21. 彼 / 彼女がどのように行動するつもりかたいていわかるので、彼 / 彼女を頼りにすることができる	.70	.65
26. 彼 / 彼女といると、どんなことがあっても安心していられる	.67	.71
13. 私たちが今までにしたことのない重要な決定をするとき、彼 / 彼女は私の幸せを常に気づかってくれる	.67	.75
2. 彼 / 彼女は私の幸せを気づかってくれている	.66	.75
7. 彼 / 彼女はいつも私の力や支えになってくれる	.66	.78
22. 問題をかかえているとき、私が何も言わなくても、彼 / 彼女は気づかってくれる	.64	.65
19. 自分の弱さをさらけ出したとしても、彼 / 彼女はそれを受け入れてくれる	.62	.74
8. 私にとって大切なことに関しては特に、彼 / 彼女はとても頼りになる	.59	.69
16. たとえ私と何かを分かちあう必要がなくても、彼 / 彼女は分かちあってくれる	.59	.63
20. たとえ彼 / 彼女が不自然な言い訳をしても、彼 / 彼女の言っていることを信じることができる	.52	.46
4. 私自身のどんなことでも彼 / 彼女に安心して話せる	.51	.71
10. *私たちの将来はどうなるのかよくわからない	-.50	-.36
17. 彼 / 彼女は私にした約束を必ず守る	.49	.49
25. *私たちの関係が、この先10年間続くとは決して確信できない	-.44	-.39
23. 彼 / 彼女が私のことで何か決定をしても平気である	.43	.47
15. *彼 / 彼女が私にも影響があるような決定をしなければならぬとき、私はとても不安である	-.42	-.17
1. 彼 / 彼女が彼 / 彼女のしたいように行動しても、それを不安に思わない	.41	.26
3. 彼 / 彼女は一つの方法に執着することなく、あらゆる方法で物事に対処する	.39	.35
18. 彼 / 彼女はとても一貫した行動をする	.38	.36
12. *彼 / 彼女のことはよくわからないので、彼 / 彼女の行動がよめない	-.34	-.29
6. 彼 / 彼女の定着した行動パターンをよく知っている	.32	.46
24. *彼 / 彼女がどういう反応をするかが怖くて、私は時々彼 / 彼女との関わりをさける	-.29	-.45
9. *彼 / 彼女が私の嫌がることをしないという確信は全くない	-.29	-.35
11. *常に用心深くしていなければ、彼 / 彼女に私は利用されてしまうかもしれない	-.23	-.21
14. 彼 / 彼女は私に隠れて浮気をしない	.12	
5. 二人の関係が脅かされると思うような活動を彼 / 彼女にされても、私は平気である	.11	.20
自乗和	6.27	7.03
寄与率(%)	24.1	28.1

注 採用した項目は負荷量をゴシック体で表記した。 *逆転項目

Table 3 各指標の平均値と標準偏差

	時点 1	時点 2		変化(親密化指標)
対人関係観の因子				
防衛的な見方	3.27(.40)	3.61(.40)	<i>n.s.</i>	
協調性・誠実性	3.25(.40)	3.55(.46)	<i>n.s.</i>	
自己成長の契機	2.05(.41)	2.38(.54)	<i>n.s.</i>	
主張性	2.08(.49)	2.43(.57)	<i>n.s.</i>	
恋愛・友人関係の指標				
恋愛行動	2.68(.63)	2.73(.56)	<i>n.s.</i>	.057(.48)
恋愛信頼	3.01(.52)	3.01(.61)	<i>n.s.</i>	.004(.51)
友人行動	2.49(.60)	2.36(.55)	$t_{(50)}=2.97, p<.01$	-.124(.30)
友人信頼	2.89(.53)	2.82(.54)	<i>n.s.</i>	-.063(.29)

それぞれの指標を時点 2 から時点 1 の得点を引いたもの。カッコ内は標準偏差。 $n=46 \sim 51$

Table 4 対人関係観(時点 2)を従属変数とした重回帰分析の結果

従属変数	R ²	説明変数	標準偏回帰	単相関
防衛的な見方(時点 2)	.30***	防衛的な見方(時点 1)	.55***	.55***
協調性・誠実性(時点 2)	.38***	協調・誠実(時点 1)	.49***	.55***
		恋愛行動の変化	.28*	.38**
自己成長の契機(時点 2)	.16**	自己成長の契機(時点 1)	.40***	.40**
主張性(時点 2)	.58***	主張性(時点 1)	.65***	.70***
		恋愛行動の変化	.31**	.40**

恋愛信頼の変化、友人行動の変化、友人信頼の変化はどの分析においても選択されなかった。
* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

短期群においては、恋愛行動の変化と「協調性・誠実性」および「主張性」との間に有意な正の相関が見られた($r=.60, p<.01$; $r=.53, p<.01$)。一方、長期群においては、どの組み合わせにも有意な相関が見られなかった。よって、短期群においてのみ、恋愛行動が親密になれば、「協調的・誠実的になるべき」「主張すべき」といった対人関係観を重視するようになると言える。恋愛の親密化の影響が見られるのは交際が始まって1年以内である可能性が高いことが示された。

恋愛・友人関係の親密化が対人関係観に及ぼす影響(男女別による検討)

恋愛関係や友人関係については性差が確認されている。例えば、恋愛相手へのコミット(関与)の大きさは初期から中期においては男性の方が女性より大きい(松井, 1990, 1993)、女性は男性よりも異性の友人と恋人との区別を明確につけている(Rubin, 1970; 山本, 1986)などがある。したがって、対人関係観への影響にも性差が見られる可能性があるため、男女別に恋愛・友人関係の親密化と対人関係観との関連を相関分析により検討した(Table 6)。

まず、男性を対象とした相関の結果を見る。恋愛行動の変化は「協調性・誠実性」および「主張性」との間に有意な正の相関が見られた($r=.66, p<.01$; $r=.47, p<.05$)。よって、恋愛行動が親密になれば、「協調的・誠実的になるべき」「主張すべき」といった対人関係観を重視するようになると言える。また、友人信頼の変化は「協調性・誠実性」との間に有意な正の相関が見られた($r=.53, p<.05$)。よって、友人への信頼が増加すれば、「協調的・誠実的になるべき」という対人関係観を重視することがわかった。

次に、女性を対象とした相関の結果を見る。恋愛行動の変化は「主張性」との間に、友人行動の変化は「防衛的な見方」との間に、友人信頼の変化は「主張性」との間に有意な正の相関が見られた($r=.40, p<.05$; $r=.39, p<.05$; $r=.40, p<.05$)。よって、恋愛行動が親密になれば、「主張すべき」という対人関係観を、友人行動が親密になれば、「防衛的な態度を取るべき」という対人関係観を、友人信頼が増加すれば、「主張すべき」という対人関係観を重視するようになると言える。

Table 5 「時点2の対人関係観」と「恋愛関係の変化」の相関(恋愛期間別)

		防衛的な見方	協調性・誠実性	自己成長の契機	主張性
短期群 (n=25,28)	恋愛行動の変化	-.14	.60**	.16	.53**
	恋愛信頼の変化	.06	.08	-.19	.08
長期群 (n=21,23)	恋愛行動の変化	.06	.11	.25	.15
	恋愛信頼の変化	-.11	.21	.20	.28

* $p < .05$, ** $p < .01$

Table 6 「時点2の対人関係観」と「恋愛・友人関係の変化」の相関(男女別)

	防衛的な見方	協調性・誠実性	自己成長の契機	主張性
恋愛行動の変化	-.20	.66**	.14	.47*
	.14	.23	.23	.40*
恋愛信頼の変化	-.15	.44+	-.07	.34
	.09	-.02	-.09	.00
友人行動の変化	-.23	.24	-.35	.21
	.39*	-.12	.07	.22
友人信頼の変化	-.22	.53*	-.42	.01
	-.01	-.02	.15	.44*

上段が男性(n=17~21)の値、下段が女性(n=28~30)の値。+ $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$

考察

恋愛・友人関係の親密化が対人関係観に及ぼす影響

時点2の対人関係観を従属変数とした重回帰分析の結果、恋愛行動の変化が対人関係観の「協調性・誠実性」と「主張性」に影響することが分かった。ここでとらえた「恋愛行動の変化」とは、様々な恋愛行動を行うようになること、つまり行動頻度の増加を意味している。そして、相手と頻りに接触し、多くの活動を共有するようになれば、互いの意見の食い違いや葛藤も多く経験されるようになるだろう。その食い違いや葛藤を解決し、関係を維持していくためには、率直に自分の考えを伝え合うこと、また相手の立場で物事を考え、協調的で誠実な態度でもって解決を目指す事が重要になると考えられる。藤森・藤森(1992)は、対人葛藤に関する自分の欲求や意向を表明せず、自己の利益を優先するような方略を用いると問題が長期化し、相手に対する好意度も低くなることを示唆している。また、Rusbult, Johnson, & Morrow(1986)は、問題が生じた時、話し合いを避けたり別れ話を持ち出したりするような行動よりも、問題について話し合ったり両者の妥協点を見出すようにしたりするような建設的な行動の方が関係の良好さにつながることを見出している。このように、恋愛の行動面での親密化に伴い、自己主張し、協調的な態度を持つことの重要性を強く実感し、それが対人関係観の発達につながるのではないだろうか。ただし

相川(2000)によると、対人葛藤の対処や自己主張をうまく行うには一定のスキルが要求されると述べており、このようなスキルも同時に獲得していく必要があると考えられる。

また、交際期間別の分析により、恋愛行動の変化が対人関係観の「協調性・誠実性」と「主張性」に与える影響が、恋愛関係形成の初期において顕著であることも示された。恋愛関係には独特な心理現象のあることが知られている。例えば、愛の要素の一つとして、Steinberg (1986)とDavis(1985)は「情熱」を挙げている。これは相手のことばかり考える、相手や自分たちの関係を理想化する、生理的に興奮するといった内容を含む。また、「情熱」は、関係形成初期のころは急速に高まりかつかなり強力なものとなるが、その後時間経過に伴って低減していくと仮定されている。このような感情体験は、恋愛関係以外の他の関係では経験される事は少なく、かつ強力な体験であることから、本人にとってこれまでにない新奇な体験であると推測される。したがって、このような体験が生じやすい交際の初期において親密化の影響が強く見られたのではないかと考えられる。

男女別にみた関係の親密化が対人関係観へ及ぼす影響

男性における分析では、友人信頼の変化と「協調性・誠実性」との間に関連が見られ、また、女性における分析で

も、友人信頼の変化と「主張性」との間に関連が見られた。協調的な態度を取る、自分の意見を主張するといった行為は、藤森ほか(1992)や Rusbult *et al.* (1986)に従えば、対人葛藤を解決し関係を維持するためには重要であるが、かえって関係がまずくなくなったり自分が傷ついたりというリスクも伴うであろう。例えば、自分が協調的な態度で接しても、もし相手が自分を裏切り利己的な行動に走ると、著しい不利益をこうむる可能性がある。つまり、協調的で誠実な態度で接するその背景には、相手も同様な態度で接してくれるだろうという期待があると考えられる。これは、相手がそのような裏切り行為をしないと信頼できるからこそ協調的で誠実な態度で接することができるとも言えよう。また、自分の意見や考えを率直に述べることで、相手の辛辣で批判的な態度を引き起こし、それによって自分が傷つく可能性もある。相手がこのような冷たい態度を取らない、相手から嫌われる危険性がないと安心して初めて、自分の意見や考えを率直に述べるのではないだろうか。したがって、友人に対する信頼が増加すれば、協調的な態度を持つことや自己主張することが可能になると考えられる。

また、女性では友人行動の変化と「防衛的な見方」との間に正の関連が見られた。友人との行動頻度が増加すれば、意見の食い違いや葛藤も生じ、このような状況は上手く対処できれば、関係発展の契機につながるが、関係崩壊の危機にもなりかねない。そのため、防衛的な態度(信頼しすぎない、あまり深く関わらないなど)を強固にしたのであろう。

恋愛関係と友人関係の比較

全体の分析では、友人関係の指標は対人関係観に対する影響が見られなかった。これは、友人関係よりも恋愛関係の方が青年に対してより大きな影響力を持つことを示唆している。久保(1993)はRCIの妥当性と限界を検討しており、その中には相手から受ける影響の強さに関する指標が含まれている。それによると、友人から受ける影響よりも恋人から受ける影響の方が強いことを示しており、本研究の結果を支持している。友人関係の場合は、もしある人との関係が悪化しても、他の人と良好な友人関係を持ちうるという意味で代替が容易である。一方、恋愛関係の場合は、その人との関係が重要であり、代替が容易ではない。そのような理由から、恋愛関係の方が友人関係より影響力が強くなったのであろう。

恋愛関係の崩壊に関する知見であるが、宮下・臼井・内藤(1991)や堀毛(1994)も恋愛が青年に与える影響の大きさを示唆している。宮下ほか(1991)は、大学生を対象に失恋体験を調査した結果、失恋のダメージは中学や高校時代より大学時代のほうが大きく、高校以降の失恋では、それが肯定的な方向での自己変化を促すことを見出

した。また、堀毛(1994)は、恋愛関係の発展や崩壊と社会的スキル(異性関係スキルと基本スキル)について検討している。その結果、異性関係スキル、基本スキルとも恋愛関係の発展に伴って高まることが示され、さらに、過去の失恋体験もスキルの向上に影響することが示された。これらの研究は、青年にとって、恋愛が非常に重要でインパクトの強い体験であること、恋愛によって自己の成長が促される可能性のあることを示唆している。

まとめと問題点

今回の調査では、恋愛関係の親密化が「協調性・誠実性」「主張性」といった対人関係観に影響することが確認できた。さらに、このような影響は恋愛関係の初期において強く見られることも確認された。また、男女別の分析においては友人信頼や友人行動の影響も見られた。

本研究の問題点としては、関係の親密化のとらえ方が挙げられる。行動頻度の増加と信頼の増加でとらえたが、関係の親密さの指標については他にも様々なものがあるため(e.g. Aron, Aron, & Smollan, 1992; Berscheid *et al.* 1989)、それらの指標との比較検討をしていく必要がある。

引用文献

- 相川 充 2000 人づきあいの技術 セレクション社会心理学 20 サイエンス社
- Aron, A., Aron, E. N., & Smollan, D. 1992 Inclusion of other in the self scale and the structure of interpersonal closeness. *Journal of Personality and Social Psychology*, 63, 596-612.
- Berscheid, E., Snyder, M., & Omoto, A. M. 1989 The relationship closeness inventory: Assessing the closeness of interpersonal relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, 57, 792-807.
- Davis, K. E. 1985 Near and Dear: Friendship and love compared. *Psychology Today*, February, 22-30.
- 藤森立男・藤森和美 1992 人と争う 松井 豊(編) 対人心理学の最前線 (pp. 141-151) サイエンス社
- 飛田 操 1991 青年期の恋愛行動の進展について 福島大学教育学部論集(教育・心理部門), 50, 43-53.
- 堀毛一也 1994 恋愛関係の発展・崩壊と社会的スキル 実験社会心理学研究, 34, 116-128.
- 加藤秀俊 1966 人間関係 中央公論社
- Kerckhoff, A. C. & Davis, K. E. 1962 Value consensus and need complementarity in mate selection. *American Sociological Review*, 27, 295-303.
- 久保真人 1993 行動特性からみた関係の親密さ - RCI の妥当性と限界 - 実験社会心理学研究, 33, 1-10.
- 松井 豊 1990 青年の恋愛行動の構造 心理学評論, 33, 355-370.
- 松井 豊 1993 恋愛行動の段階と恋愛意識 心理学研究, 64, 335-342.
- 宮下一博・臼井永和・内藤みゆき 1991 失恋経験が青年に及ぼす影響 千葉大学教育学部研究紀要, 39, 117-126.
- Murstein, B.I. 1970 Stimulus - value - role: A theory of marital choice. *Journal of Marriage and The Family*, 32, 465-481.

長沼恭子・落合良行 1998 同性の友達とのつきあい方からみた青年期の友人関係 青年心理学研究, 10, 35-47.
落合良行・佐藤有耕 1996 青年期における友達とのつきあひ方の発達の变化 教育心理学研究, 44, 55-65.
Rempel, J.K., Holmes, J.G., & Zanna, M.P. 1985 Trust in close relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, 49, 95-112.
Rubin, Z. 1970 Measurement of romantic love. *Journal of Personality and Social Psychology*, 16, 265-273.
Rusbult, C. E., Johnson, D. J., & Morrow, G. D. 1986 Impact of couple patterns of problem solving on distress and nondistress in dating relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, 50, 744-753.
Steinberg, R. J. 1986 A triangular theory of love.

Psychological Review, 93, 119-135.
山本真理子 1986 友情の構造 人文学報(東京都立大学人文学部), 183, 77-101.
山中一英 1994 対人関係の親密化過程における関係性の初期分化現象に関する検討 実験社会心理学研究, 34, 105-115.
山中一英・石田靖彦 1998 人間観に関する研究(1) -人間観尺度の構成に関する予備的検討- 日本グループ・ダイナミクス学会第 46 回大会発表論文集, 74-75.

註

1)本研究の一部は日本社会心理学会第 42 回大会において報告された。

The effects of forming intimate relationships on one's view of interpersonal relationships - Romantic relationships and friendships among adolescents -

Noriko TAGAWA (*Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University*)
Toshikazu YOSHIDA (*Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University*)

The purpose of this study was to examine the effects of forming intimate relationships upon one's view of interpersonal relationships by questionnaire in a longitudinal design. The view of interpersonal relationships meant one's way of view on relating to others. Forming intimate relationships, closeness, was measured by the quantities of behaviors or activities conducted with one's partner and by the feeling of trust in him/her. Questionnaire was delivered twice at 3-months intervals. Subjects were 51 students (21 males and 30 females) who responded to both surveys. The results indicated that as the behaviors in romantic relationships became more intimate, people tended to consider it important to cooperate and behave in sincere attitude toward others and to state their opinions clearly. Such a tendency was remarkable for the people who had romantic relationships for less than 1 year.

Key words: intimate relationships, romantic relationships, friendships, view of interpersonal relationships, term of romantic relationships